

仙台

文学館

ニュース

Sendai
Literature
Museum
News

第四十五号

エッセイ

あかまつの道を抜けて

第7回 —— 「エゴノキの花」

佐伯一麦

梅雨入り間近と思われる六月の休日、仙台文学館での今年最初のエッセイ講座へと足を運んだ。数日前、館のTwitterで、銀鈴が降りそそいでいるかのように、下向きにたくさんの花を付けたエゴノキの写真を見かけており、少し早めに着くなり、その場所を探して歩いた。

エゴノキの花は盛りが短く、散り急いだ花がすぐに樹下にたまるので、気が急いだ。前もって学芸員から、エゴノキがある場所を記したマップをメールで送ってもらっていたおかげで、池のある石舞台のそばにすぐに見つけられた。深く五つに裂けた白い小花は、ほとんど落ちかけていたが、残花もちらほらと見えて、エゴノキの花と出会いたい、という思いは果たせた。

遊歩道をもう少し奥まで歩いて行くと、「あかまつの道」に出る境の近くにも、向かい合わせに二本のエゴノキがあった。こちらは、花が残っており、薄暗い林の中にあって、そこだけ薄目を集めたように、樹々全体が白い光を帯びて見えていた。

落花の一つを拾い上げて鼻に近付けると、石けんのおいがする。それを私

に教えたのは連れ合いで、彼女が生まれ育った武蔵野にはエゴノキが多く、花を採みつぶすと泡立つことから、子供の頃は落花を集めて石けんの代わりに遊んだという。

ひと月後、次のエッセイ講座のときには、地下鉄の台原駅の方から「あかまつの道」を歩いて来ると、エゴノキは灰白色の実をたくさん吊り下げていた。私の子供の頃には、この実を採ってきて石で潰し、小川へと撒いて、小魚が弱って浮いてくるのを捕まえた思い出がある。大人になって、エゴノキの花や実には、サポニンの成分が含まれており、それが泡立ったり魚毒となると知った。名前の由来も、実がえごい(えぐい)ことから。

ちなみに、伊達騒動に材をとった歌舞伎の『伽羅先代萩』(の、ぞせんだいはぎ)の中での見せ所の一つ、乳人政岡が御飯を炊く「飯炊き」の場面で、子千松が「こちの裏のちさの木に、雀が三疋留つて、一羽の雀が言ふことにや、夕べ呼んだ花嫁御」と唄う歌詞にある「ちさの木」は、エゴノキの当地での別名である。

(さえきかずみ 作家・仙台文学館館長)

※「あかまつの道」は、台原森林公園と仙台文学館をつなぐ散策路です。

CONTENTS

エッセイ

「あかまつの道を抜けて」佐伯一麦 ……1

シリーズ

「私の一冊」三沢陽一 ……2

特集

「佐伯一麦 北根ダイアローグ2023」抄録 ……4

予告

2023年度 秋・冬の企画展 ……7

文学館日誌 ……8



写真:佐々木隆二



版画：明才

シリーズ「私の一冊」第39回

三沢陽一

連城三紀彦

『戻り川心中』

妖花のような一冊である。連城三紀彦氏の『戻り川心中』（現在は光文社文庫）のことだ。今は廃刊になってしまった「幻影城」という雑誌の新人賞を受賞し、七十八年にデビューした氏はその後、花と恋愛とミステリと美文を融合させた、緻密な織物のような芸術的な連作短編集を描いた。それがミステリ界に屹立している「花葬シリーズ」である。「戻り川心中」はその中の一編で、推理作家協会賞を受賞している最も有名な傑作であり、このシリーズをまとめた本のタイトルともなっている。

「戻り川心中」は大正時代の天才歌人が引き起こした心中事件を描いた短編だ。しかし、その事件には明かされることのなかった企みが秘められていて……というのが大まかなあ

らすじである。大傑作なので秀逸な大仕掛けには驚かされるし、それを支える文章力があって、氏が本作に込めた尋常ではない熱量に圧倒される。当然中心人物の歌人は架空だ。でも、作中に登場する十を越える短歌は、連

城氏が作ったものにもかかわらず、実在の歌人が創作したもの、と云われても違和感がない。また、伏線についても一読しただけでは気づかないほど巧みに美文に組み込まれていて、読むたびに発見がある。

僕の『戻り川心中』との出会いは大学一年生のときだ。東北大学推理小説研究会の先輩に教わった。だが、今では信じられないことに、僕は当時、本作を「文章も細やかな情景も美しいんだけど、面白くないな」と思ってしまった。多分、僕の読書体験が足りなかったのだと思う。でも、心には引っかかった。

時間の流れに摩耗されることなく数十年、数百年残る文章で綴られた小説こそ本物だろう。ただ、中には初めて読んだときにピンと来ない本

も多い。読者にある程度の「読む力」がないと本来の面白さが判らない本もあるのである。判りやすいステレオタイプの小説が跋扈している現代においては、真っ先に切り捨てられているタイプだ。それがどうにも僕

はもどかしい。読書というものは一生の趣味で、心の中の広大な庭に様々な花を植えていくようなものだと考えるときがある。植えたときは気に入らなかつたものでも、何度か季節が巡るうちに、その花だけが持つ美麗さに心奪われる日が来る。まさに僕にとって『戻り川心中』がそうで、一年後に再読したときは「どうしてこんな大傑作のよさが判らなかつたのだろう」と猛烈に自分を責めた。だから、初読のときにそこまで面白くないと思っても、何かしら引っかかる部分があったら時間を置いて読んで頂きたい。読書は人生を変える数少ない経験なのだから。以来、僕は連城氏の作品を片っ端から集めて読み漁り、氏のつま先くらいには触れたいなと思つて小説を書くようになった。

その後、僕はミステリや純文学を中心に新人賞に数え切れなくらい応募し続けた。けれども、六回も最

た。何と連城氏が亡くなったというのだ。実際に亡くなったのは十九日だったようだが、訃報が愛読者の涙とともに全国を駆け巡つたのはこの日だった。よりにもよつて授賞式の朝である。

駅で僕を迎えてくれた早川書房の編集者が、「三沢さん、大丈夫ですか？」と気を遣つてくださったお陰で無事に授賞式は終えられたし、ここまで小説めいていると水中の影のように現実感がなく、衝撃は薄かつた。けれども、あれから約十年が経つが、日に日に、「連城さんに会いたかつた」という気持ちは堆積していく。それに、仮に僕が売れっ子作家ならば、おこがましくも「連城さん



連城三紀彦
『戻り川心中』
(初版発行：1980年
光文社文庫)

終候補に残つたのにどうしても受賞できない。僕は負けず嫌いなので執念で書き続け、何とか二〇一三年に第三回アガサ・クリステイ賞を獲り、デビューすることができた。根性や努力やましてや才能で受賞したのではない。単に僕の執念深さが作家への道を開いたのである。ともあれ、作家になることができた。このとき、僕の頭にヨコシマな考えが過つたことは云うまでもない。やっと作家になれたのだから憧れの連城氏にお会いできるのではないか。

授賞式の二〇一三年十月二十二日、遅刻するわけにはいかなから早めに起床し、朝食を食べながら、インターネットでニュースをチェックした僕はまるで落葉のように崩れ落ち

の衣鉢を継いで……」と云えるだろうが、そうではない。それが悔しいし、亡くなった氏に申し訳ないな、とさえ思う。それほど、僕にとって『戻り川心中』は大きな一冊なのである。妖艶な花に魅せられ、自分の文章が大嫌いでサークルに入るまで創作などしたことなかつた僕に小説を書かせ、売れていないとはいえ作家の末席にいられるのはこの本のお陰である。『戻り川心中』との出会いが僕の人生に影響を与えたのは確かだが、不安定な生活の作家にならずに他の職業に就いた方が幸せだったかもしれない。でも、まったく悔いはない。常に僕の心の中には、氏の描いた幻の花が咲いているのだから。



三沢 陽一
みさわ よういち

作家。1980年、長野県生まれ。1999年、東北大学法学部に入学。それ以降、仙台市在住。2013年、第3回アガサ・クリステイ賞を受賞し、『致死量未満の殺人』（ハヤカワ文庫JA）でデビュー。2020年4月から2023年3月まで「河北新報」夕刊にてエッセイ「誰もが街を愛してる」を連載。近著として、仙台を舞台にした『なぜ、そのウイスキーが謎を招いたのか』（光文社文庫）がある。

佐伯一麦

北根ダイアローグ二〇二二 〜佐藤厚志と語る (抄録)

当館館長の佐伯一麦が、各分野で活躍している方を迎えてお話を伺うシリーズ企画「北根ダイアログ」。第四回目のゲストは、『荒地の家族』で第一六八回芥川賞を受賞した作家の佐藤厚志さん。仙台市内で書店員として働きながら芥川賞という快挙を成し遂げた佐藤さんの横顔に迫ります。

(写真：佐々木隆二)

◆芥川賞を受賞して

佐伯 まずは改めて、芥川賞を受賞しての感想や、生活の変化があったのかなど、その辺りを伺いたいと思います。

佐藤 そうですね、感想をもつ暇もなくというか。去年の年末から半年間、受賞してからは特にですけれども、目の前のことをこなしていくのがやっとで。「わーい」って喜ぶよ

うなシーンは全くなく今に至り、今さら喜んでも、みたいな気持ちになつています(笑)。

佐伯 (笑)

佐藤 生活の変化という面ではもちろん大きかったですけど、シンブルに仕事がたくさん目の前にあつて、その中で出来るだけ今まで通り、一日何時間か執筆にあてるっていうルーティンを死守するのに必死な感じですかね、今は。



佐藤 厚志 (さとうあつし)
1982年仙台市生まれ。作家、書店員。2017年「蛇沼」で新潮新人賞、2020年「境界の円居」で仙台短編文学賞大賞を受賞。2021年「象の皮膚」が三島由紀夫賞候補となる。2023年「荒地の家族」で芥川賞を受賞。2023年1月から7月まで「河北新報」に「常盤団地第三号棟」を連載。



佐伯一麦 (さえきかずみ)
1959年仙台市生まれ。作家、仙台文学館館長。著書に「鉄塔家族」「ノルゲ」「還れぬ家」「渡良瀬」「山海記」「アスペストス」「Nさんの机で」など多数。近著は「川端康成の話をしようじゃないか」(小川洋子氏との共著)。

佐藤 タイトルは結構シンプルで。まずは家族のストーリーですから

「家族」という言葉と、あとは、実際に(作品の舞台の)巨理の沿岸部が荒涼としてるわけではないんですけど、主人公の心象風景として、とても荒涼として映るということ、

はなかつたつて言つてたね。
佐藤 そうですね。岩波文庫の棚を眺めた時に『荒地』は頭にはありませんでしたが、ちよつとどういふうになつたかは分かんないです。タイトルは後から付けました。書いてる時は、パソコンには「植木屋」という題で保存してて(笑)。ずっと「あー、『荒地の家族』にしようかな」みたいな感じで。

佐伯 二十世紀のモダニズムの詩の金字塔といわれるT.S.エリオットの『荒地』という詩があつて、東北学院大の植松靖夫先生(佐藤さんの恩師)が、多分この『荒地の家

族』の「荒地」はここから来てるんじゃないかとおっしゃっていた。でも作者としては、特にエリオットの『荒地』を意識したつていうわけ

部分があつても大事なんですね。意識して作つたものはあまり大したことではないけど、その人の無意識で影響を受けているものが、小説というものを深める。エリオットの『荒地』は第一次世界大戦の後に書かれて、

佐伯 芥川賞の選評が「文藝春秋」に出たけれども、その中で嬉しかった選評はありましたか？

佐藤 批判的なものも全部栄養にはなつたので結局ありがたいんですけど、山田詠美さんの選評は特に。テーマの一つである震災はあらかじめ書こうと思つたわけではないですが、書きながら出てきたものではあつて。物語に色付けするために震災を持つてきたわけではなかつたという気持ちがあつて、そこをすごく酌んでくださった。

佐伯 それから吉田修一さんも、「胸に熱いものが込み上げてきた」と。

佐藤 選評ではないんですが、授賞式で吉田さんにお会いした時に、「これからは好きなものを書いていんだよ」といふうに声をかけていただいたのは、すごく嬉しかったですね。

◆『荒地の家族』と『荒地』

佐伯 作者として『荒地の家族』のタイトルに込めた意味合いみたいなものがあつたら。

戦争でヨーロッパが非常に荒廃して、スペイン風邪があつたりした中で、「四月は最も残酷な月」で始まる。その次に、「ライラックを

めさせ、記憶と欲望をなげきし、春の雨で生気のない根をふるい立たせる」(岩崎宗治訳)とある。荒地にライラックをもう一回咲かせるのは植木屋だろう。だからこの主人公は植木屋なんだつて思つたけど、佐藤さんはそんなつもりは全然なかつた(笑)。

佐藤 (笑)

◆欠点と長所

佐伯 佐藤さんの小説は、過去の記憶や想念が何度もフラッシュバックします。あの辺はやっぱ意識的に？

佐藤 意識して書きました。風景描写もそうですし、主人公の思うことも繰り返し、同じ想念がめぐるような感じで。

佐伯 佐藤さんは習作の頃から「せんだい文学塾」や山形の「小説家・ライター講座」に参加していて。印象に残つてるのは、佐藤さんは一つのことを何回も繰り返しいろんなふう

佐伯 僕が印象的だったのは、小川

洋子さんが、「東日本大震災を文学として記すためにはどうしたらいいか、ひとつの道筋を明示している」と。震災を描くという部分はやっぱり意識はしただろうし、難しさもあつたんじゃないかなと思うんですけど、その辺どうでした？

佐藤 もちろんアプローチに何が正しいというのもないんで、あくまでも僕のやり方としては、まず個人として捉えてみる。そこで風景や見えるものの中から、真実を込めていくというようなやり方で、手の届くところから立ち上げていったっていう感じです。それである程度うまくいったのかなという感じもします。

かつて言つた時に、講師の阿部和重さんが良い指摘をしてくれたそうですね。

佐藤 一緒に来られた編集者は、重複した表現は無駄なのでカットした方が良くつていふんですけど、阿部先生は、むしろ良いと。つまりそれだけ作者が、風景が見えているというのが示している、と言つてくださったのが嬉しくて。その時「あ、この書き方でいいんだな」と思った記憶があります。

佐伯 くだいというの欠点かもしれないけれども、欠点と長所というのは本当に紙一重で。欠点だと言われたら作家はそこをすつこく追求して、もつとすつこく書いてやるぐら

佐藤 そうですね。もちろん全部自分の言う通りというわけにはいかなないので、客観的な意見として受け入れつつも、ギリギリ残したいなと。

◆書店員との両立

佐伯 これは皆さんも気になつてると思うんですけど、書店員をしながらどうやって時間を取つて芥川賞につながるような作品を書いたのかなあ



佐藤 なかなかやっぱ大変で。書店は営業時間が長くて、早番と遅番っていうのがあるんです。早番の時は、夕方仕事が終わったら喫茶店に行つて、二時間が三時間ぐらい書いて。遅番の時は午前中に書いて、昼ぐらいに会社に行く。休みの日に「今日は二十枚書くぞ」とかは全くなく、平日と同じペースで二時間と

か。あまり無理せず、時間を積もらせ、貯金していくような感じで。
佐伯 書けない時は何かしたりしますか？
佐藤 書けない時は、何か違うことをやるっていう気分転換はなくて、しがみつくって感じですね。一文字だけでも、一文だけでも、無理やり二時間じつとしてみたい。
佐伯 やっぱプロの作家になれるかどうかは、書けなくても二時間とか机の前に座っていられるかが分かれ目ではあるでしょうね。ところで、佐藤さんにとつての文学は、どういうものなんだろう？
佐藤 何か特別なものではなくて、たまたま僕が得意でやっている仕事というか。他の仕事と比べて特別ではなく、日常的に出来ることをやっているという感じなんです。本屋で働いてみて、自分のサラリーマン的な能力のなさは痛いほど感じて（笑）。だからやっぱ、得意なことをやったほうがいいなっていう思いが強まり……。

佐藤 そうですね。やっぱ日常というか。小説書くのも、なんか面倒くさい、今からやんなきゃいけないのか、みたいな気持ちでやっているから（笑）、普通の労働とあんまり変わらないのかなっていう感じはします。
◆言葉にできないもの
佐伯 （仙台短編文学賞受賞作の）「境界の円居」の中に、「あれ。あの時。大地震。大津波。3・11。東日本大震災……。いろんな表現がある、と祥は思った。そしてどの表現もしつくりこないとも感じた。言い表しようのないものがあつた。」と。我々作家の場合は、言葉では表せないものがあるから、そのことを具体的に書くというのがあるわけですね。それが佐藤さんの作品の中に文学表現として、単なる言葉ではないものを伝えようとした、というところが（読者に）伝わったんだなという実感があります。

佐藤 どうしても日常的に使ってる言葉は、もちろんそれも大事ですけど、使っていると違和感なく受けて、違和感なく忘れてしまう。記憶に定着させたり、あえて違和感あるような言葉とか、少し引かかるような言葉を選ぶっていうのも必要じゃないかなと思います。
佐伯 小説を書けば書くほど名付けられないものがある。僕も小説で常に一番考えてるのは、名付け得ないものにどうやって言葉を与えるか。名付けられているものにそれ以上言葉を与える必要はないけども、言葉にできないものがあることを言葉で書くしかないという、矛盾したものは。
佐藤 多分これは表現できないだろうなと思つたものを、表現しきれなくても、どうにか自分なりに表現して立たせられた時は、少し充実感があります。
佐伯 でもやっぱ、書き上げた時に「やったあ」っていうのはない。
佐藤 ないですね。
佐伯 佐藤さんを見ると、冷静だし、自己客観が強い人なんだなあという感じがします。今後も益々の活躍をお祈りしています。
佐藤 ありがとうございます。（2023年7月9日開催）

予告 仙台文学館 二〇二三年度秋・冬の企画展

2023年10月～12月

企画展 「石川裕人 演劇に愛をこめて」

石川裕人（1953～2012）は、1970年代から仙台を拠点に演劇活動を行い、幅広いジャンルの戯曲を作り続け、生涯で106本の作品を書き上げた劇作家・演出家です。

旗揚げした劇団「十月劇場」「TheatreGroup "OCT/PASS"」で精力的に公演を続けるかたわら、県内のジュニア劇団・シニア劇団への脚本提供・演出など幅広い世代の演劇人材の養成にも尽力し、2011年の東日本大震災後は、震災に向き合った戯曲の制作に取り組みました。宮城の演劇界を牽引し、「ニュートン」の愛称で多くの演劇人に慕われた劇作家・石川裕人の生涯と演劇世界を、台本、当時のチラシ・チケット、公演当時の写真や映像、関係者たちの回想などによってたどります。



石川 裕人（いしかわ ゆうじん）
1953年、山形県東根市生まれ。劇団「十月劇場」「TheatreGroup "OCT/PASS"」などを主宰した。作風はテント劇、野外劇、シリアスな社会劇、スラップスティックコメディ、児童劇、宮澤賢治の作品を脚色するシリーズなど幅広い。1991年度宮城県芸術選奨新人賞、1996年度宮城県芸術選奨、2006年オーディオドラマ脚本「ミック、俺も男だ！」でNHK奨励賞受賞。2012年、逝去。現在は「演劇ユニット石川組」が石川作品の上演を続けている。



「方丈の海」のワンシーン

企画展「石川裕人 演劇に愛をこめて」
会 期＝2023年10月7日（土）～12月17日（日）
休 館 日：月曜日（10月9日は開館）、10月26日（木）、11月24日（金）
開館時間＝9:00～17:00（展示室への入場は16:30まで）
観 覧 料＝一般460円、高校生230円、小・中学生110円（各種割引あり）

2024年1月～2月

新春ロビー展 「100万人の年賀状展」

第22回となる新春恒例の「100万人の年賀状展」。心に残っている本の題名、おすすめの一冊、好きな作家、忘れられない作品の一節、自作の詩や短歌、俳句、川柳、好きな作家や作品の主人公などに宛てて書いた年賀状、絵手紙など、自由な発想でお書きいただいた年賀状作品を、広く皆さまから募集し、展示します。年賀状の小さな紙面に出品者の思いが詰まった作品の数々をお楽しみいただけます。年の初めのすがすがしさと共に、年賀状という文化を感じていただける企画です。12月頃から作品を募集します。あなたもぜひ作品をお寄せください。



新春ロビー展「100万人の年賀状展」
会 期＝2024年1月10日（水）～2月12日（月・振休）
休 館 日：月曜日（2月12日は開館）、1月25日（木）
開館時間＝9:00～17:00 観覧料＝無料

2024年1月～3月

企画展 「文学の記憶（仮称）」

当館では、明治以降の宮城・仙台ゆかりの文学資料を多数所蔵しています。本展では、仙台で刊行された文学誌や、そこに集った文学者たちの書簡や原稿をはじめ、学都仙台の基礎を築いた東北帝国大学の教授たちの交流、この地を訪れた文豪の足跡など、宮城・仙台で展開した文学的な出来事を、資料や記録から年代順で紹介いたします。

企画展「文学の記憶（仮称）」
会 期＝2024年1月20日（土）～3月17日（日）
休 館 日：月曜日（2月12日は開館）、第4木曜日、2月13日（火）
開館時間＝9:00～17:00
（展示室への入場は16:30まで）
観 覧 料＝一般580円、高校生230円、小・中学生110円（各種割引あり）

2023年3月～2023年7月



①この原稿は、テレビ番組「開運！なんでも鑑定団」への出品がきっかけとなって発見されました。



②息子からみた母のエピソードと、評論家の視点での作品評に、いわさきちひろファンの聴衆のみなさんは熱心に耳を傾けました。



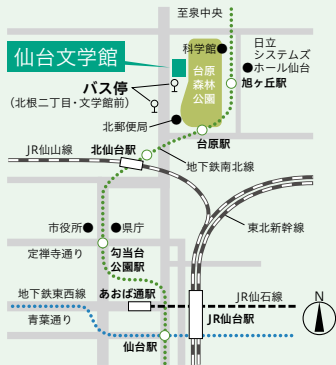
③人間を怖がる様子を見せないカモシカ。この後、悠然と森に消えていきました。(写真提供:カフェひざしの杜)



④7月にはコイの赤ちゃんも誕生。あらためて文学館の自然の豊かさを感じます。

- 6月 6日 敷地の池でカルガモのヒナが7羽誕生しているのを発見。(写真④)
- 11日 特別展「いわさきちひろの世界 ピエゾグラフィ展」会期終了。最終日となるこの日、社会学者・上野千鶴子氏による講演会「いわさきちひろ 美しいものを守る闘い」を開催。
- 13日 外看板と館内のバナーを夏休み企画「こども文学館えほんのひろば ささめやゆき物語」に掛け替え。
- 17日 企画展示室にて洋画家・杉村惇(仙台市名誉市民)の作品展「存在と空間の伝説 第6章 画室の韻律」を開催(6月28日まで)。
- 7月 9日 佐伯一麦館長による対談イベント「北根ダイアログ」を開催。ゲストは芥川賞作家の佐藤厚志さん。(本紙4～6ページ参照)
- 15日 夏休み企画「こども文学館えほんのひろば ささめやゆき物語」オープン(9月10日まで)。夏休み恒例の「おはなし会」が4年ぶりに復活。

- 3月 5日 写真展「仙台コレクション2001-2022」関連イベント、「暗室ワークショップ」を開催。
- 19日 写真展「仙台コレクション2001-2022」関連イベント、「仙台偽コレクション」を開催。
- 21日 写真展「仙台コレクション2001-2022」会期終了。
- 23日 外看板と館内のバナーを特別展「いわさきちひろの世界 ピエゾグラフィ展」に掛け替え。
- 4月 29日 特別展「いわさきちひろの世界 ピエゾグラフィ展」オープン(6月11日まで)。
- 29日 常設展示室にて、遺族の井上ユリさんから寄贈された井上ひさしの未発表戯曲原稿「うま」を展示。(写真①)
- 5月 5日 特別展「いわさきちひろの世界 ピエゾグラフィ展」関連イベントとして、美術・絵本評論家の松本猛さん(いわさきちひろの長男)による講演会「母、いわさきちひろの作品と思い出」を開催。(写真②)
- 7日 佐伯一麦館長による特別講座「佐伯一麦と読む 川端康成『心中』」を開催。
- 17日 2階情報コーナーに、4月9日に逝去された今村忠純さん(日本文学・演劇研究者)の追悼コーナーを設置。今村さんは井上ひさしや岸田國士の作品の研究で知られ、当館の講座や展示にも協力いただいた。
- 20日 特別展「いわさきちひろの世界 ピエゾグラフィ展」関連イベント、ワークショップ「ちひろの“にじみ”技法体験 マグネットとメッセージカードをつくろう」を開催。講師は安曇野ちひろ美術館の宍倉恵美子学芸員。
- 24日 当館敷地内にカモシカが出現。(写真③)
- 6月 3日 4年ぶりに「ことばの祭典」(短歌・俳句・川柳の合同吟行会)を対面で開催。「開く(ひらく・あく)」もしくは「靴」の詠題で、短歌67首、俳句68句、川柳64句から各賞が選ばれた。



交通のご案内

■バス利用の場合

(宮城交通バス)

- 仙台駅西口バスプール2～4、6番乗り場 仙台北・泉地区方面行 (北山トンネル経由を除く)

(市営バス)

- 仙台駅西口バスプール6番乗り場 八乙女駅行
- ※いずれも「北根二丁目・文学館前」下車

■地下鉄利用の場合

- 地下鉄南北線「台原駅」下車、南1番出口より徒歩約25分(台原森林公園内あかまつの道経由)
- ※山道です。雨天時は道が滑りやすくなりますので、ご注意ください。

■駐車場40台(無料)

- 台数に限りがございます。なるべく公共交通機関をご利用ください。



カフェ ひざしの杜

お食事、デザート、各種お飲み物などをご用意しています。お得なランチメニューもあります♪

〔営業時間〕
10:00～16:00(ラストオーダー15:50)
※ランチは10:00～14:00
TEL 022-219-1341

